

日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所 日本産業衛生学会九州地方会
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1
鹿児島大学歯学総合研究科
衛生学・健康増進医学
TEL (099) 275-5289
FAX (099) 265-8434

発行責任者：地方会長 堀内正久

(題字：倉恒匡徳筆)

巻頭言

リスクアセスメントは現場実装されるか

産業医大 産業保健管理学 堀江正知



現行の労働安全衛生規則は、昭和47年9月30日に公布され今月で50年を迎える。令和4年5月31日付けの最新改正では第577条の2が新設され、法令の条文として初めて「リスクアセスメント」という言葉が記された。特別則も同時改正され、化学物質による健康障害の防止をめざす。令和5・6年度から施行予定の内容が多いが、約3000の化学物質が対象となるので、これまで有機溶剤や特定化学物質の取扱いがなかった事業場でもリスクアセスメントの義務が生じる可能性がある。

リスクアセスメントは、欧米が先行して導入した概念であり、約50年前の英国でRobensらを取りまとめた事故報告書に源流がある。事故現場を検証すると多くの法令違反が見つかるが、その理由として法令が複雑多岐になり過ぎていることが指摘された。細部にわたって「手段」を規定するよりも、現場で実態をよく観察して、事故や健康障害が生じるリスクを評価し、リスクを許容できる水準まで低減する活動を促すほうが合理的と考えている。すなわち、リスクアセスメントが求めるのは何を実施したかではなく「成果」なのである。その際、専門職の関与と記録に基づくPDCAの継続が必須となる。リスクアセスメントは、すでに20年以上前にISO、JIS、ILO等の文書として公表され、現在、国際的な産業保健の基盤として定着している。わが国は、これに呼応した法改正を積み重ね、平成17年改正で第28条の2、平成26年改正で第57条の3をそれぞれ新設し、2つの大臣指針も公表してきた。しかし、その後も化学物質による健康障害の発生が続き、リスクアセスメントが現場で実践されていると自慢できる状況ではない。

今回の省令改正で注目しているのは、リスクアセスメントが適切に実施されている事業場に特別則の適用を大胆に

除外したことである。大手事業場を中心に適用除外が盛んに申請されることを期待したい。その条件として、事業場に専属の「化学物質管理専門家」を選任していること、実施したリスクアセスメントを事業場に属さない「化学物質管理専門家」が適切と評価していることが規定された。その資格要件は、実務経験5年以上の労働衛生コンサルタント(労働衛生工学)、実務経験8年以上の衛生工学衛生管理者又は作業環境測定士、日本作業環境測定協会認定オキュペイショナル・ハイジニスト等である。ここで、他職種での実務経験は厳格に審査しなければ、資質や指導力が不十分な「化学物質管理専門家」が横行しかねない。

一方、中小事業を含む全ての対象事業場において「化学物質管理者」の選任が義務化された。こちらは新たに実施予定の専門的講習の受講が促されるが、化学物質の製造事業場以外では努力義務とされ、管理者というよりも担当者のようなものである。「作業環境管理専門家」や「保護具着用責任者」という役職も新設されたが、いずれも他資格での実務経験が考慮される予定なので、その資質も多様なものとなる。そして、化学物質への曝露が疑われる労働者が生じた場合は、医師がその曝露を評価する検査項目を提案して実施する健康診断が規定された。今回、化学物質管理の専門医を養成する制度は示されていないので、一般の産業医にその役割が期待されることになる。実際、リスクアセスメントに関する事項を産業医の職務や衛生委員会の付議事項に位置づける事業場も出てくると推察する。

本来、リスクアセスメントを推進する専門家は、専門教育を修めたオキュペイショナル・ハイジニストが適任であろう。しかし、わが国では少数しか養成されておらず、活躍の場も限られていた。産業医や衛生管理者には、リスクアセスメントを振られても手に余るという人が多いように思われる。産業保健分野に新たな取組を導入する際に問題になるのは、低価格で最低限の事項だけ済ませようとする経営者の存在である。これを防ぐためには、化学物質管理

専門家が労使から独立した立場から科学的に業務を遂行する必要がある。事業者に便宜を図って不正やバイアスが生じるようなことがあれば、この政策は形骸化し、専門職の信頼も失墜するであろう。専門職を自負する者こそ、法令が規定する「手段」だけを追うのではなく、現場に認めら

れる「成果」を得るよう努力すべきである。産業保健分野における真の専門家によって、リスクアセスメントが現場に実装され、将来的には化学物質以外の有害要因にも応用される日が訪れることを期待したい。

レジェンドの声

研究者と研究テーマについて

三角 順一
(大分大学 名誉教授)



研究者にとって、研究テーマ、特に、ライフワークのテーマ選定は、極めて重要です。私の50有余年の研究生活を振り返りつつ、研究テーマの選定の背景、又は、動機等について、考えてみたいと思います。これにより、堀内正久先生のご依頼の趣旨でもある、若い先生方のお役に立てるメッセージとなれば嬉しく思います。

入局当時、私が所属していた熊本大学公衆衛生学講座の主任教授野村茂先生から頂いた研究テーマは、「二硫化炭素による健康障害」についてであった。このテーマは、後で分かったことだが野村先生の恩師であり、当時の日本産業衛生学会理事長の久保田重孝先生の関心事でもあったようである。野村先生は、週一回教室で行われる恒例の「抄読会」の度に、小生に、外国誌に掲載された二硫化炭素関連の論文を選んで下さった。しかし、私には、これを題材にした研究を遂行することは、出来なかった。そんなある日、知り合いの保健師さんから、「タバコ栽培をやっている農家の人から、「タバコ収穫作業を行うと心臓が、ドキドキして、吐き気がする。」と言う人がいるが、「何か、農作業と関係があるのでしょうか。」との電話がかかってきた。

この電話をヒントに、我が国で初めての「タバコ収穫作業者の【生葉たばこ病】の2症例」と題する我が国で初めての急性ニコチン中毒の症例報告を「産業衛生」に報告させて頂いた。

また、別の日に若い二人が、農村の穀物倉庫内でデートし、臭化メチルによる急性中毒事故で亡くなったことが地方紙に報道されていた。JAの倉庫内で、臭化メチルの穀類燻蒸作業が行われていることを初めて知った瞬間であった。このことをヒントに、臭化メチルを用いた燻蒸作業に伴う倉庫内の環境濃度の経日変動に関する実態調査を行うこととなった。この調査結果を基に、臭化メチル投入後3日目に倉庫の窓を解放後の環境濃度を測定し、日本産業衛生学会で報告した。

更に、ある観光都市の役所から、有機リン剤を使用して、道路の側溝の蚊やハエを駆除する作業に従事していた職員が体調不良を訴えているので、健康調査を行って欲しいとの依頼が舞い込んできた。それまでに、有機リン剤の急性中毒の報告はあったが、慢性中毒に関する研究論文は、存在しなかった。この調査により、慢性暴露により作業者に脳波の θ -trainが、特異的に出現することを世界で初めて明らかにした(熊本医学会雑誌)。また、親友の大分大学衛生学講座の故杉本寛治先生から、中華人民共和国の上海第一医学院とのCS2取扱い作業者の共同研究への参加依頼があり、上海市において神経生理学的研究を行った。この成果は、平田衛先生により、イタリアの学会雑誌に報告され、我が国の許容濃度策定の資料に使用された。

また、当時、有機水銀による環境汚染が社会問題となっていた。

私は、何故、このような産業化学物質による職業病や、環境汚染の問題が、社会に出た後で問題になるのだろうかかと不思議に思っていた。

そこで、化学物質が、世の中に出る前に動物実験で、予め、毒性評価がなされるべきではないかと考えた。

色々調べた結果、動物を用いた神経毒性の評価方法は、まだ、確立されていないことに気付いた。この時、この神経毒性の評価方法の確立が、自分の研究テーマだと直感した。

それから、眠れない苦悩の日々が続いた。数年経ったある日、ネズミの尻尾から、神経の活動電位を導出することを思い付いた。そして、悪戦苦闘の末、人脳波用の電極を用いて、活動電位の導出に成功した。この時の興奮と喜びは、今でも忘れることは出来ない。早速、結果を野村先生に報告し、「産業衛生」に短報で発表した。それから、この方法論の有効性の確認のための基礎的実験に加えて、有機水銀やリドカインなどの既知の神経毒物における適用実験等に、更に数年を要した。

最終的には、英文で三篇からなる、凡そ100ページの学位論文となった。ネズミの尾部を用いた神経の活動電位の導出から、凡そ、4年の歳月が流れていた。無給医局員という制度のお蔭で、研究に専念できた幸せな6年間であった。学位取得後は、隣の衛生学講座の故三浦創教授のご厚意で講師、助教授としてお世話になることとなった。この方法論が、確立したお蔭で、ノルマルヘキサン及びその代謝物質、鉛、アクリルアミド、二硫化炭素などの神経毒性を有する化合物などに適用され、研究が飛躍的に進展し、ユーゴスラビアで開催された第19回国際産業衛生会議で末梢神経に関する実験的評価方法についての研究発表を行っ

た。学位を取得し、講師となるまでは、電気刺激装置などの高価な実験装置は、研究室にはなかったもので、学内を探し回って、見つけ出し、使用していない夜間に使わせて頂いたりした。

N-ヘキサン、2,5ヘキサンジオン、及びその類縁化合物の神経毒性の比較研究に関する論文は、Br.J.Ind.Med.1984に無修正で掲載され、世界中から、100を超えるリプリント請求があった。この出来事により、研究の面白さを実感したものです。

以上は、主として熊本大学時代の研究経過であるが、大分医科大学に主任教授として異動して以降は、自分の研究生活は、このままで良いのだろうかかと自問自答した。当時、日本の死因第一位の胃がんの発症要因は不明であることが、気になっていた。

これまでの研究の発想の原点は、職場や地域で起きている様々な話題、及び学術の世界で未解決の課題等を俯瞰的に見て、研究を専ら業とする人間に求められているものは、何かを常に意識して貪欲に課題を探ることが大事であるように思います。そして、最後に、研究費がない、人がいない、時間がない、器具がないと言う言語は、忘れることも大事だと思います。最初から、全て揃っていることは、あるはずがありません。ないものを探す喜びを楽しみましょう。

私と産業保健

神代 雅 晴

(産業医科大学 名誉教授)



私は1974年に日本産業衛生学会に入会しました。今日に至るまでの半世紀近い年月の間、私は三つの地方会を渡り歩いてきました。最初は北海道地方会所属からのスタートでした。その後、九州地方会。次いで関東地方会所属となり、3年程前から九州地方会に戻りました。

私が産業衛生学会に入会した当時の北海道地方会は北海道大学医学部衛生学教室を中心として産業疲労研究が盛んに行われていました。同教室は人間工学にも造詣が深く、疲労研究を人間工学研究の側面からも取り組んでいました。したがって、毎年春に開催される産業衛生学会大会への参加に加えて、秋などに別途開催される産業疲労研究会への参加も盛んでした。当時の産業疲労研究会は質疑応答が活発で、それは妥協を許さない厳しくかつ鋭い質疑応答の連続でした。その戦場には名だたる教授陣と産業疲労研究のレジェンド達が腕まくりをして待っている状況でした。若かった私は産業疲労研究会で何回も体がすくんで喉がカラカラになった記憶があります。振り返れば、私はそこで鍛

えられたのかもしれませんが。私は産業疲労研究を介して労働科学に関心を抱きました。日本の労働科学の生みの親である暉峻義等の産業疲労研究に心酔し、彼が行ってきた産業疲労研究の先に作業管理の重要性が唱えられていると推論していました。

そこで作業管理とはなに？を英語名称 (working conditions & ergonomics) から探ってみますと、前者の working conditions は作業条件→作業負荷→働きと解釈できます。そして、後者の ergonomics 【ergo(n)労働 + nomos 法則 + ics 接尾語 = 労働の適正管理】は労働適応能力の評価→負担の改善→仕事とその仕事への適応能力とのミスマッチを少なくする、と考えることが出来ます。まずは負荷と負担とのバランスを図るのが作業管理の基本だといえます。バランス具合を評価する物差しとして産業疲労が重要な役割を果たしているという関係にたどり着きました。1980年代を過ぎますと、疲労研究は段々少なくなり、それに代わってストレス研究が大勢を占めるようになりました。疲労は測定することが出来ませんが、ストレスは測定可能ですのでより負荷/負担のバランスがとりやすくなってきたのではと思います。

私は1979年4月に産業医科大学医学部人間工学講座に助教として赴任して、1986年4月に産業医科大学産業生態科学研究所人間工学研究室の教授となりました。私は前述の考え方に基づいて、産業医教育における人間工学の役割を産業保健活動における作業管理の確立と定めました。私は従来の産業保健活動の一環として扱われてきた作業管理に人間工学の考え方と industrial Engineering (IE = 管理工学、生産工学、---) で開発された技法を加えた三位一体の作業管理を進めてきました。産業保健従事者に作業管理を理解していただくために、作業管理の見える化の旗頭として職場改善を掲げました。また、人事・労務への見える化として労働適応能力評価を掲げてきました。労働適応能力の評価は作業管理の最終ゴールである「仕事と仕事への適応能力とのミスマッチを可能な限り少なくする」ことに繋がります。我が国は2025年問題と言われている超高齢社会の到来、次いで2040年問題と言われている顕著な生産年齢人口の減少を迎えるといわれています。このような環境下にある日本は労働適応能力評価から労働寿命の推定、そして労働寿命の延伸策を模索する時代へと来ています。私は数年前に労働寿命が推定できる AAI (アクティブエイジングインデックス) の開発を手掛けました。しかし、AAI データの収集は緒に就いたばかり、これから既存の AAI を修正するのか、あるいは AAI に代わる新しい物差しを開発するのか、前途多難です。AAI を始めとして作業管理の仕事は数えきれないほどあります。しかし、私は後期高齢者と言われる歳を迎え、作業管理の集大成も遅々として進まない状況にあります。若い産業保健従事者、研究者の中から作業管理体系の確立にご関心のある方が出現される日を心待ちにしている昨今です。

名誉会員推挙についてのお礼

織 田 進

(福岡産業保健総合支援センター アドバイザー 産業医)



この度、第95回日本産業衛生学会において、名誉会員にご推挙いただきました。非常に名誉なことであり身に余る光栄に思います。日本産業衛生学会関係者の皆様に対し、この場を借りて心より厚く御礼申し上げます。私は医師であった叔父の姿に憧れ、山口大学医学部に入学しました。卒業後、山口

大学病院と国鉄の中央鉄道病院（現 JR 東京総合病院）に臨床研修医として勤務し、その後は山口大学病院血液内科に戻り溶血性貧血の研究を開始し、研究を突き詰め知見を広げるために、カリフォルニア大学へ留学しました。帰国後は山口大学に戻り、三輪教授に産業医科大学第一内科を紹介していただきました。助教授になった頃、思うように研究成果があがらず、優秀な後輩たちが次々に素晴らしい論文を発表するなか、次第に居場所のなさを感じるようになっていました。このような状況を察してか、産業保健を専門とする先輩に産業保健分野へ進むことを勧めいただき、産業医実務研修センターに異動しました。2005年に産業医科大学を退職し、福岡産業保健推進センター（現福岡産業保健総合支援センター）で所長として勤務している頃、パーキンソン病と診断されま



した。不安を感じなかったと言えば嘘になりますが、ただただ毎日無我夢中であつという間に過ぎ去りました。ここに至る道中、非常に多くの方々とお会いする機会に恵まれ、たくさんのお知恵を拝借し、実に多くのことを学ばせていただきました。これら全てが私のかけがえのない宝物となっています。

福岡産業保健総合支援センターでは主に中小規模事業場の支援を中心に活動してきました。日本で働く労働者の6割が産業医を選任する必要のない職場で働いています。その多くが産業保健サービスから取り残されているのです。私はこの問題を解決する1つの提案として、労働者が自分の健康を積極的に管理するためのアプリ「自己健康管理のこすけん」を今年の3月にリリースしました。Personal Health Record のはじめの一歩として、入力の手間をなくし、写真や音声、録画などで手軽に医療情報を保存できるアプリです。自宅に保管している医療情報をスマホに保存して持ち歩くことで、旅先などの急病などにも役立ちます。今後はより多くの人にこのアプリを日常的に使ってもらえ

るよう積極的に広めたいと思っています。

最後になりましたが、私が今日まで産業保健に携わってこられたのは、労働安全衛生総合研究所の大久保利晃先生、西日本産業衛生会の東敏昭先生をはじめとする多くの先生方のお力添えの賜物です。ここに記して心より感謝の意を表します。本当にありがとうございました。



新入会や新しいポジションに就かれた方の声

新入会の御挨拶

谷口 奈央

(福岡歯科大学 口腔保健学講座 口腔健康科学分野)



このたび、日本産業衛生学会に入会いたしました福岡歯科大学口腔保健学講座の谷口奈央と申します。私は1998年に九州大学歯学部を卒業し、九州大学大学院では予防歯科学を専攻しました。福岡歯科大学には2005年に赴任し、総合歯科学講座で10年間、臨床研修医

に対する総合的歯科診療の教育にあたりました。外来では予防歯科と口臭を専門とし、全身と口の健康の繋がりを、呼気・口気に注目して研究をおこないました。

2015年に現在の口腔保健学講座に異動してからは、乳幼児健診や企業健診、職域での禁煙支援を目的とした健康イベント開催など地域保健活動にも取り組んできました。2020年秋の新病院開院にあわせて新設された健診センターでは、主要構成員として歯科ドックや学校健診を担当しています。現在は、埴岡 隆教授が定年退職され宝塚医療大学に赴任された後の講座運営を2022年4月から引き継いでいます。

日本産業衛生学会との出会いは、2018年に熊本市で開催された第91回日本産業衛生学会のシンポジウムで「口臭からみる従業員の健康」についてお話をさせていただいたときでした。久しぶりに大規模な学会に参加し、歯科学会にはない、講演集の厚み、会場やシンポジウム、参加者の数に圧倒されました。また、講演後に多様な職種の人たちから多くの質問やご意見をいただき、大変新鮮な気持ちになりました。

口臭は本来誰にでもあるものですが、周囲が気付くレベルの口臭は治す必要があります。その多くが口の健康由来し、歯周病、衛生状態不良、口腔乾燥、う蝕などが原因となります。全身の健康状態では生活習慣病が口臭に強く影響します。例えば、糖尿病では血糖コントロールが良好でないとアセトンが発生し甘酸っぱい口臭の原因となります。糖尿病は歯周炎のリスクであるため、歯周病由来の口臭にも影響します。高血圧症では治療薬の副作用として口腔乾燥が発現すると口腔の衛生状態が悪化し、口臭の原因となります。主要な生活習慣病のコモンリスクファクターである喫煙は、タバコそのものによる口臭だけでなく、歯周病のリスクとしても口臭に影響します。

近年、健康寿命の延伸への口の健康維持・増進の重要性が認識されています。6月7日に政府が発表した「経済財政運営と改革の基本方針2022」には「国民皆歯科健診の具

体的な検討」の一文が明記されました。私は、歯科健診からその後の歯科受診や口腔健康管理における自立的な行動変容を促す動機づけとして口臭が役に立つのではないかと考えます。私どもの研究グループは、唾液検査による口臭判定法の開発や加熱式タバコ禁煙の動機づけへの口臭検査の有用性についての検討などに取り組んでいます。これから口臭をキーワードに産業保健で何ができるかを考えながら、みなさまのお力を頂きながら研究活動を進めていきたいと思っております。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

社会福祉施設の労働災害予防に関する取り組み

樋口 周人

(産業医科大学病院 リハビリテーション部
産業衛生学修士 理学療法士)



産業衛生学会ならびに九州地方会に所属されている皆さま、はじめまして。今年度より入会させていただきました。理学療法士の樋口周人と申します。

現在、産業医科大学病院で臨床業務を行うかたわら、社会人大学院生として社会福祉施設の労働災害予防研究を行っております。

社会福祉施設では腰痛や転倒による労働災害が特に多く、理学療法士の持つ専門的知識や技術によって予防できる可能性を秘めています。

従来、理学療法士が行う労働災害予防の実例としては、事業所へ直接出向き、集団で体操教室を開いたり、研修会を行うことが一般的でした。しかし、新型コロナウイルス感染症が確認された2019年以降のパンデミックの影響で、病院勤務の理学療法士が直接対面で、なおかつ集団で体操教室を行うことは極めて難しい状況となりました。これまで社会福祉施設で起きる腰痛や転倒による休業4日以上労働災害発生件数は同年までは微増傾向でしたが、コロナ禍にあたる2020年以降、発生件数が急激に増加しています。専門的知識や技術を時代や情勢に合わせて、提供する手段を変えなくてはならないことを身をもって感じました。2022年6月からは社会福祉施設で働く介護士および介護福祉士を対象に、マンツーマンのオンライン理学療法による労働災害予防効果を検証するためのランダム化比較試験を順次開始します。オンライン上での理学療法は感染リスクを回避しながら行うことが可能で、なおかつ忙しい業務の合間や自宅でも参加することが可能です。個人のニーズに合わせたストレッチやエクササイズ動画配信も行う予定です。本研究が社会福祉施設の労働災害予防を解決するための糸口となることを期待しております。また、今回の無

作為化試験に先立ち、実施可能性調査 (feasibility study) を2022年2月から約2ヶ月間行いました。労働災害防止に関心の高い社会福祉施設の管理者の協力のもと定量的かつ定性的に我々の介入方法や参加者および介入者の声を分析しました。本調査の結果は第32回産業衛生学会全国協議会で発表予定ですので、九州で活躍されているたくさんの産業保健職の皆さまにご意見いただけますと幸いです。労働人口減少という社会問題が今後ますます関心を集める中で、業種に応じた労働災害防止対策のニーズは高まってくると考えております。まずは理学療法士という立場から今できることを地道に行い、時代や事業所に受け入れられる形を愚直に模索していきたいと思っております。参加者および参加施設は現在も募集中ですので、ご興味がありましたらいつでもご連絡ください (e-mail: shuto.higu@gmail.com)。また、研究内容に関するご質問やご相談などの意見交換も積極的に行いたいと思っておりますので是非ともお声掛けください。労働災害予防の取り組みを通してたくさんの方々と新しい出会いや繋がりが得られることを楽しみにしております。皆さま、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

就任・新規入会のご挨拶

財津 將 嘉

(産業医科大学 高齢労働者産業保健研究センター)



日本産業衛生学会九州地方会の皆様、こんにちは。2021年に産業医科大学高齢労働者産業保健研究センターが創設され、2022年4月に初代教授・センター長として着任いたしました、財津將嘉 (ざいつまさよし) と申します。皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は、福岡出身で、ラ・サール高校にて3年間を鹿児島で過ごしました。2003年に九州大学卒業後、東京大学泌尿器科学教室に入局し、臨床医として働きました。全身管理を学ぶため、北里大学で2年間の麻酔科研修も行いました。医師10年目に、医学の興味が「治療」から「予防」へ移りました。膀胱がんの患者がタバコのリスクを知らなかったためです。川の上流で問題が起きているのに (喫煙リスク)、下流だけで解決しようとしている (治療)。このギャップは、がん診療の臨床経験のある誰かが埋めなければならない、それならば私がやろう、と使命感を感じました。

そこで、2012年、東京大学大学院に進学し、公衆衛生学の小林廉毅教授に師事し、医学博士を取得しました。大学院修了後は、小林教授からのお誘いで、2016年より東京大学医学部公衆衛生学教室の助教として医学教育と研究に携わりました。同年秋よりハーバード大学の Ichiro Kawachi 教授のもとに留学し、リサーチフェローとして

3年半、がん・循環器疾患の社会格差研究 (特に職業背景) に従事しました。日本の職業臨床データを用いて、職業背景によるリスクの差を明らかにしました。一般的な生活習慣リスクにも取り組み、「少量飲酒によるがんリスク」の研究は New York Times や Newsweek などでも紹介されました。

2020年からは獨協医科大学で周産期疫学や多種職によるドクターヘリ疫学研究の立ち上げ、保健所支援や産業医活動など様々な活動を行いました。現在の産業医科大学でも、素晴らしいスタッフや仲間恵まれています。産業医としての実務経験は浅いですが、日々精進しています。今後の高齢労働者の労働災害の予防はもちろん、生活習慣病の予防にも、産業医が益々活躍するのであろうと確信しております。

現在、高齢労働者の労働災害の対策として、エイジフレンドリーガイドラインが策定されています。労働災害の予防を加速させるには、職業関連疾患を幅広く網羅的かつ持続的にモニタリングし、大規模疫学研究が実施可能な研究基盤の整備が必要であると思っています。産学官連携を実践し、工学系や数学・統計学など医学領域分野を超えた学内外の研究機関との連携も深めることも重要と考えています。そして、何よりも大切なのが、「科学者」である産業医育成です。人命に関わる医師は、患者や現場から沢山のことを学びます。この経験をもとに、人や職場が抱えている問題を解決できる研究マインドと情熱を持った産業医を育成していきたいと思っています。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



会員交流

オンライン版飲酒日記プログラム (SNAPPY-DOC) のご紹介

角 南 隆 史

(佐賀県医療センター 好生館)



こんにちは。佐賀県医療センター好生館（総合病院）で精神科医師をしております、角南隆史（すなみたかし）と申します。2006年に大学を卒業後、初期研修を経て、2008年から2018年まで精神科単科病院にて依存症や認知症の診療を行いました。2018年からは佐賀県医療センター好生館にて精神科の

外来診療、病棟リエゾン業務を行いながら、病院内の産業医業務も行っています。

個人的にはアルコール依存症者や多量飲酒者への治療的介入に興味を持っており、厚生労働科学研究やAMEDの中で、アルコール健康障害についてオンラインで介入のできるサイトを作成しています。具体的には、自分のお酒の飲み過ぎ度合いを調べるサイト（SNAPPY-CAT）、自らの飲酒量からアルコールの分解完了時刻を調べるサイト（SNAPPY-PANDA）、アルコールの心身への影響についてYouTube形式のナレーション付き動画で解説するサイト（SNAPPY-BEAR）などです。

今回新たに、オンライン版飲酒日記プログラム（SNAPPY-DOC）を作成しました。これはGoogleのアカウントを用いてログインした後、まず最近7日間の飲酒量を記録していただきます。そしてその飲酒量に基づいて、飲酒に関する目標（1週間の総飲酒量は〇グラムまで、休肝日は週〇日作る、など）を立てていただき、日々の飲酒量を記録していくプログラムです。日々の飲酒量や目標の達成度に応じたフィードバックは自動的に行われます。このプログラムの効果検証を、本学会の九州地区の会員の皆様にご協力を頂きつつ、複数の職域において多量飲酒者を対象に行いました。そしてその結果はJournal of Occupational Healthに掲載されました¹⁾。ご協力いただいた会員の皆様、研究参加者の皆様、誠にありがとうございました。

なお上記のプログラムは全て、ウェブ上にフリーアクセスで公開されています。Google等の検索サイトで「SNAPPY-CAT」と検索していただくか、右のQRコードからアクセスしていただけますと幸いです。



- 1) Sunami, T., So, R., Ishii, H., Sadashima, E., Ueno, T., Yuzuriha, T., & Monji, A. (2022). A randomized controlled trial of the web-based drinking diary program for problem drinking in multi workplace settings. Journal of occupational health, 64(1), e12312. <https://doi.org/10.1002/1348-9585.12312>



部会報告

医部会

小田原 努

(公社)鹿児島県労働基準協会 ヘルスサポートセンター鹿児島



令和4年度の九州産業医部会では、来年2月に研修会を予定しています。2022年7月中旬時点では、新型コロナウイルス感染症もBA.5への置き換えもあり、感染爆発の様相を呈していますが、幹事も現地集合はままならず、まずは、7月3日にZoomで開催しました。新型コロナ感染症の動向も

読めない中ですが、本年度の研修会は、2023年2月11日に博多周辺の研修会場とWebのハイブリッドで行うこととしました。会場に集合しての開催は、3年ぶりとなりそうです。現地参加が困難な方の事も考え、九州産業医部会としては、初めての試みですが、Zoomを用いたWebの研修会も考えております。

テーマは、産業医科大学高齢労働者産業保健研究センター 教授の財津将嘉先生をお招きし、「高齢労働者の産業保健：高齢労働者産業保健研究センターの設立を踏まえて」を予定しています。産業医科大学のホームページによりますと、高齢労働者産業保健研究センターは、高齢労働者の増加に伴う労働災害の予防及び産業構造の変化による新たな課題に対応することを目的とし、令和3年4月に設置されたとのことです。高齢労働者の健康確保に関係する学内の各部署と横断的に研究調整を行い、高齢労働者に特化した研究を推進するとともに、高齢労働者の労働衛生に係る教育研修及び産業保健専門職を養成する活動を行うとのことです。

高齢労働者の健康管理については、近年大きな課題となっています。健康起因事故の多発や、両立支援の問題、介護問題を抱えた労働者の支援等、課題が多彩であり、産業保健職としても、切実な課題となっていると思います。

この研修会を機に、課題を整理し、対策の一助が得られることを期待しています。

会場参加やWeb視聴に人数制限を設ける可能性もありますが、年明けから受講者の募集を開始いたしますので、積極的に参加登録お願いいたします。

看護部会

山下 珠美

(ニシム電子工業株式会社)

2021年度日本産業衛生学会九州地方会産業看護研究会を2022年1月8日(土)開催しました。今回は千葉大学大学院理学研究院 准教授 高橋佑磨先生より「伝わるデザイン～労働者の多様性に配慮した魅力的な資料の作り方・デザインの基本～」とのテーマで、資料作成に焦点を当て、労働者の多様性(高齢者・色覚多様性等)に配慮した、読みやすく、見やすく、魅力的な資料の作り方・デザインの基本を学ぶことを目的として、資料・PPT作成等で必要な情報デザインの基本ルールやテクニックについてご教授いただき、研究会後にはオンラインでは初の試みで産業看護職の意見交換の場を設けました。

高橋先生の研修内容は「読み手の負担を減らす=思いやり」のために読みやすい書体やフォント、図表・図形のノイズを減らす、見やすいレイアウトと配色など詳細にわかり、終了後に行ったアンケートでは「大変わかりやすく、直ぐに活かせそうな内容でよかった。」「フォントや色の選び方一つ一つが目からウロコでした。」「日々、資料作りに自信がなく、なんとなくになっていました。今回、資料作りのポイントや、人が視覚で得られる処理する情報の原則を学びました。個人のセンスではなく、基本を押さえて、伝わる資料を作りたいと思います。」などの意見をいただきました。また今回は新型コロナ感染症対策としてオンラインセミナー(zoom)で行ったこともあり、九州だけではなく全国から254名と大勢の参加があり、受講者のニーズにマッチした内容で満足度の高い研修となりました。

今年度の研修会は、2022年度産業看護研究会を10月29日(土)に「最新の心理学で職場の心理的安全性が高い職場をつくる」をテーマにメンタルコンパス代表、愛知医科大学非常勤講師である伊井 俊貴先生によるオンライン研修を開催する予定です。

また2022年度産業看護研究会一特別企画として、専門職として求められるスキルやキャリア形成について、自ら考え動ける人材になるためにはどのように取り組むべきなのか、産業保健を牽引されている森晃爾理事長、五十嵐千代産業看護部会長、両先生をお招きし、産業保健の最新の情報について御講演いただき、質疑応答や意見交換を行う「時代に応える産業保健看護専門職になるための未来へのヒント」を2022年12月10日(土)に福岡市内の現地とオンラインのハイブリッド形式で開催する予定です。

2022年度産業看護研究会 一特別企画—
2022年12月10日(土)ハイブリッド開催
「時代に応える産業保健看護専門職になるための
未来へのヒント」
講演：森晃爾理事長、五十嵐千代産業看護部会長

詳細は九州地方 HP などのご案内しますので、これから産業保健に取り組みたい方、また後身を育てる立場のベテランの方など、多くの方のご参加をお待ちしております。

産業看護部会では、専門職の皆様が効果的な産業保健活動を実践できるよう研修企画を行って参ります。今後も皆様のご意見やご参加をお待ちしております。

技術部会

宮内博幸

(産業医科大学 産業保健学部 作業環境計測制御学講座)

第95回日本産業衛生学会が高知市にて開催され、産業衛生技術部会専門研修会では、宮内博幸(産業医大)座長のもと「新しい時代の働き方-高年齢労働者の安全衛生管理」をテーマとして行われました。

始めに高年齢労働者の安全と健康確保対策(エイジフレンドリーガイドラインを踏まえて)と題して松葉齊氏(松葉労働衛生コンサルタント事務所)より、続いて高年齢労働者のための新しい照度基準の設定と今後と題し中村裕之氏(金沢大学)より、体力低下が原因となる労働災害対策~安全に働くために必要な体力「安全体力(R)」の取り組み~と題し乍智之氏(JFE スチール(株)区)より、労働現場における高年齢労働を考えるうえでのポイントと題し横田直行氏(三井化学(株))より、高齢に伴う健康リスクと支援の実際と題して帆苺なおみ氏(サンデン(株))からご講演を頂きました。

講師の方々は現場の高年齢労働者の安全衛生管理や研究にも長年係わっておられ、現状と展望について活発な講演が行われました。

本研修会は産業保健技術の実践的な内容を中心としたもので、発表後には参加者からも多くの質問や意見を頂きました。また、今後、企業としてあるべき姿が改めて理解でき、更なる企業発展のために大変参考になる研修会でした。

同日に「自律的な化学物質管理への転換」というテーマのもと産業衛生技術部会フォーラムが橋本晴男氏(橋本安全衛生コンサルタントオフィス)と藤間俊彦氏(AGC(株))を座長として開催されました。伊藤昭好氏(労働安全衛生総合研究所)より新しい化学物質管理の概要についてと題



した講演から始まり、中原浩彦氏(NAOSH コンサルティング)より技術部会としての対応計画の概要について、原邦夫氏(産業医科大学)からは産業衛生技術専門職のコンピテンシーに関する調査・研究から、持田伸幸氏(ENEOS(株))よりは海外の化学物質管理-担当人材の役割と育成の観点から、土肥誠太郎氏(三井化学(株))より自律的な化学物質管理への転換-学会および産業衛生技術部会は何をすべきか-産業医の視点からと題して講演が行われました。

今後の化学物質管理において、リスクを考慮した合理的な管理が重要であること、一方、労働衛生の3管理を中心に、いろいろな職種と連携して対応することの重要性が学べました。また、法令は最低限の取決めであり、より自主的なきめの細かい活動が必要であることが学べました。一方、事業所内には多くの関連企業や職種の方が混在している場合が多く、化学物質の情報を正しく伝達する、他の業務と化学物質管理が兼務である場合は、十分な化学物質管理を行いづらい可能性があり、特に周辺からの支援がより重要であることが学べるフォーラムでした。

これから産業衛生技術部会の行事を通し、専門技術職として活躍が今後ますます期待されていることが理解できました。

歯科保健部会

埴岡 隆

(福岡歯科大学 名誉教授)



今年の骨太方針に「国民皆歯科健診」が含まれました。正確には「生涯を通じた歯科健診(いわゆる国民皆歯科健診)の具体的な検討」ですが、「歯科健診」が一人歩きし、国民に親しい4文字となりました。「生涯を通じた」に着目すれば、多くの時間・場所を過ごす、産業部門の歯科保健にもそ

の役割が大いに期待されます。産業歯科保健部会は、2007年の第80回日本産業衛生学会総会(大阪)で設立記念フォーラムが開催され、2022年幹事会の地方会報告ではその内容が飛躍的に充実しはじめました。

私は、標準的な健診・保健指導プログラムの改訂に咀嚼の質問が含まれたことから2018年の「産衛九州」の巻頭言で「口腔機能のエビデンス活用」をお願いし、2021年には国連世界保健総会(WHA)の画期的な「口腔保健決議」文に「workplace」が2度も現れ、世界の口腔保健政策に産業衛生の関わりが認知されたことをお知らせしました。2018年の熊本での産業衛生学会、2020年の鹿児島での全国協議会では、身近なところに産業衛生に関わりのある歯科保健の内容があることを紹介し、九州の職域の方々の歯科

保健への意識を高めることができましたと思います。

本年の産業歯科保健部会幹事会では「特定健康診査受診者の主観的咀嚼状態と食習慣の関連性」の日本予防医学協会（九州事業部から）の演題が産業歯科保健部会部会長表彰を受けたことが報告され、「健康をストレス、デバイス、バイオシス、レジリエンスから説明するー加熱式タバコと炎症応答を例にした歯科固有の対応」産業歯科支援者交流会オンラインセミナー、産業衛生関係の発表を報告しました。日本口腔衛生学会は産業歯科保健活動と関係の深い学会ですが、日本予防医学協会九州事業部の長年にわたる産業歯科保健活動の実績が評価され、口腔保健事業振興賞の表彰を受けたことも報告されました。九州口腔衛生学会幹事会では、各県の行政、歯科医師会代表に日本歯科医師会の産業衛生のホームページにある最近の産業歯科保健制度の充実を紹介し、日本産業衛生学会入会を引き続き呼びかけました。

九州以外から、歯科特殊健康診断充実、改正THP指針により変わる歯科保健、産業保健師他職種連携、人間ドック連携、COVID-19流行・感染予防・情報機器作業・巣ごもり生活・メンタルヘルス、歯科保健指導と行動変容、口腔機能測定、歯科疾患と全身疾患の関連検証、事業場外資源活用、口腔顎顔面領域の慢性疼痛、職域と地域の融合、咀嚼等歯科関連質問の活用など様々な話題がありました。さらに、令和3年度厚生労働科学研究（労働安全衛生総合研究事業）「職域での歯科口腔保健を推進するための調査研究」の結果報告とともに事例収集と評価指標の検討予定が紹介されました。

本報告が九州の産業歯科保健活動の理解の一助となれば幸いです。本学では、口腔保健学講座谷口奈央教授が産業歯科保健活動を展開します。何卒よろしく願いいたします。

研修会・学会の報告と予告

2022年度日本産業衛生学会 九州地方会学会のご案内（第2報）

齊藤 功

（大分大学医学部 公衆衛生・疫学講座 教授）

新型コロナウイルスが収束しない状況が続いているため、現地参加とZoomによるリモート参加を予定しております。なお、座長の先生におかれましては現地での参加をお願いします。

日時：2022年10月14日（金）、15日（土）

会場：J:COM ホルトホール大分 & リモート（Zoom）

学会長：齊藤 功

事務局：大分大学医学部 公衆衛生・疫学講座

〒879-5593

大分県由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地

ダイヤルイン 097-586-5735、FAX 097-586-5739

学会HP：<http://www.med.oita-u.ac.jp/phealth1/meeting/index.html>

1. 学会スケジュール

1日目 10月14日（金）

13:00～14:00 自由集会

14:00～14:30 受付

14:30～14:40 開会の挨拶

14:40～16:40 一般口演（12題）

16:50～17:50 教育講演

「職域における動脈硬化性疾患の疫学」

大分大学医学部 公衆衛生・疫学講座 教授
齊藤 功

17:50～18:50 九州産業医部会幹事会

19:30～ 懇親会（場所：レンブラントホテル大分）

2日目 10月15日（土）

9:00～ 9:30 受付

9:30～10:30 特別講演

「健康経営で健康寿命日本一」

大分県福祉保健部理事 兼 審議監

藤内 修二

10:40～12:30 一般口演（10題）

12:30～13:30 総会

13:30～14:30 自由集会

2. 一般口演募集

口演発表を希望される方は、一般演題申込書を8月31日（水）正午までにご提出下さい。そして、学会HPから抄録作成用のWordファイル（Endai_Name.docx）をダウンロードし、抄録と略歴を記入後（A4で1枚以内）、自分の所属と名前でも別名保存（例：大分医大_齊藤.docx）し、

メールタイトルを「九州地方会 抄録提出 氏名」として 9 月 9 日(金)までに以下に送って下さい。

kosyu1@oita-u.ac.jp

送信後、2 日以内に確認のメールがない場合、お問い合わせ下さい。

3. 参加登録

9 月 9 日(金)までに QR コードか以下の URL から登録して下さい。

参加登録後、参加費支払用 URL が届きます。

<https://www.lions-take5.com/jsoh-k2022/>



4. 学会参加費

(現地参加、Web 参加ともに) 3,000円 (非会員4,000円)

5. 自由集会

集会名とおおよその参加人数(現地、オンライン)について、8月31日(水)までにご連絡ください。

kosyu1@oita-u.ac.jp

送信後、2 日以内に確認のメールがない場合、お問い合わせ下さい。

6. 日医認定産業医制度単位

(生涯研修・専門各 1 単位を申請中)

日本医師会の規定により、単位の取得は現地参加者のみです。

7. 産業保健看護専門家制度認定単位

専門 2 単位申請中

8. 最新の情報につきましては、学会 HP でご確認ください。

令和5年度九州地方会学会のご案内 (第 1 報)

大神 明

(産業医科大学 産業生態科学研究所 作業関連疾患予防学)

日本産業衛生学会九州地方会学会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、令和 5 年度の地方会学会を下記の通り開催させていただくことになりましたので、ご案内申し上げます。

さて、久しぶりの北九州市での開催となります。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行は、第 7 波となり、まだまだ収束が見えないところですが、開催はハイブリッド形式の 1 日開催とし、万全を期して皆様の活発な意見交換の場になるよう準備いたします。

教育講演、特別講演などの内容につきましては、現在鋭意準備を進めているところでございます。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

記

令和 5 年度九州地方会学会

会 期：令和 5 年 11 月 11 日(土)

会 場：産業医科大学 ラマツイーニホール
(北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1)

学会長：大神 明(産業医科大学 産業生態科学研究所
作業関連疾患予防学 教授)

参加費：3000円(会員)、4000円(非会員)

懇親会：未定

一般演題募集：令和 5 年 6 月頃に学会のご案内をする予定です。演題締め切りを 9 月下旬、プログラム発送を 10 月に予定しています。

事務局：産業医科大学 産業生態科学研究所
作業関連疾患予防学

〒8807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1

電話 093-691-7471



理事会報告

編 集 後 記

2022年度
第1回九州地方会理事会

第1回理事会が、2022年8月7日(日)10:00-11:10 Webで開催されました。

議 題：

- 1) 2021年度第2回理事会議事録要旨について
- 2) 2021年度事業・決算報告について
- 3) 2022年度事業計画・予算案・会員数について
新しい試みとして、学術論文支援に関して予算を計上しているとの説明があった。
- 4) 2022年度地方会学会の開催について
- 5) 2024年度地方会学会の開催地について
歯科保健部会が担当、福岡歯科大学での開催を検討。

報告事項：

- 1) 日本産業衛生学会本部関係
- 2) 選挙関連について
選挙管理委員会委員が、部会等から選出された。被選挙者名簿は1つに統一されるとの報告があった。
- 3) 2022年度「研究会等」開催について
- 4) 産衛九州の編集状況
- 5) その他
産業看護部会の名称が産業保健看護部会に変更が検討されているとの説明があった。学会会員数を増やすためにも、各県の産業看護師・保健師組織にセミナーなどの参加の呼びかけを各県理事等にして欲しいとの要望があった。

コロナ禍の夏も3度目を迎えた。感染者数は第7波を迎え、最大数を更新するニュースが流れている。その一方、花火大会や夏祭りなども開催され、昨年や一昨年の夏とはやや違う状況でもあると感じる。今号では、織田進先生が名誉会員となられたこともあり、3名の「レジェンド」の先生方にご寄稿を頂いた。大所高所からの視点を含んだ文章であり、多くの学びがあり、ご一読をお願いしたい。巻頭言では、産業医科大学の堀江先生から、これからの化学物質管理に関する話題をご寄稿いただいた。拝読して、まだまだ現場実装化には混乱が予想され、また九州という地域での対応において、一般性と特殊性を考える必要性を感じた。この10月には、この会報でも紹介のあった地方会学会が齊藤先生(大分大学)の下、大分市で開催される。大分県での開催は、三角先生(本会報にご寄稿)以来、28年ぶりのことである。鹿児島から一番遠い九州の地域が大分ということもあり、折角の機会であり、現地を訪れることが今から楽しみである。ハイブリッドでの開催ということなので、オンラインでも対面でも、より多くの交流がなされることを願っている。

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行 2022年9月1日

編集正責任者：堀内 正久 (鹿児島大学)

編集副責任者：黒田 嘉紀 (宮崎大学)

編 集 委 員：青木 一雄 (沖縄産業保健総合支援センター)

青柳 潔 (長崎大学)

彌富美奈子 (株式会社 SUMCO)

大神 明 (産業医科大学)

小田原 努 (ヘルスサポート鹿児島)

住徳 松子 (アサヒビール(株)博多工場)

堀江 正知 (産業医科大学)

森 晃爾 (産業医科大学)

森本 泰夫 (産業医科大学)

大和 浩 (産業医科大学)

(編集事務局連絡先)

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

鹿児島大学歯学部総合研究科

衛生学・健康増進医学

TEL(099)275-5289 FAX(099)265-8434

E-mail: masakun@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp